

さよなら、お義父さん・・・

2007年8月18日

インディアンの古老が言いました。

もしも君が

枯葉ってなんの役に立つの？と訊いたなら

わたしは答えるだろう、枯れ葉は、病んだ土を肥やすのだと。

君は訊く、冬はなぜ必要な？するとわたしは答えるだろう、

新しい葉を、生み出すためさと。

君は訊く、葉っぱは何であんなに緑なの？と、

そこで、わたしは答える、なぜって、彼らは命の力であふれているからだよと。

君がまた訊く、夏が終わらなきゃならないわけは？

私は答える、葉っぱがみな亡くなって次の命になるためと・・・

お盆の前に、僕の愛した義父が亡くなりました。二年前にガンを発病し、一ヶ月から半年と宣告された義父でしたが、二年間以上も、僕たち家族にさよならの準備を与えてくれました。突然の死とは違い、心の準備と一日をしっかりと生きることの意味を義父は教えてくれました。闘病中も、義父は泣き言のようなことは口にせず、いつも「ガンバルから」と笑いながら、細くなった腕で握手をして、逆に、僕たちを励ましてくれました。

最近になって、よく本当の強さについて考えるようになりました。義父のように、娘二人をしっかりと育て、家族の幸せだけを考え、会社を定年まで勤め上げ、孫が生まれてからは孫の幸せを祈り生きる生活。あなたから、凡人の生活にある真の強さを教わりました。

僕は仕事から、有名な経営者や、著名な人に会います。僕の血のつながった父も経営者でした。でも、義理の父は、僕の今までの人生の中で、出会ったことのない、愚直なまでに、真面目を絵に描いたような人でした。

人をうらやんだり、ズルをしないで生きることの難しい時代に、どんな大きな仕事を成功させるよりも、ただ普通に、あなたのように真面目に、誰をも敵をつくらずに、愛された人を僕は知りません。

サラリーマンとして会社を定年退職してからも、「お世話になったから」と先代の社長の写真を置いて、水を供えていたうしろ姿。

近所の散髪屋で、ヒゲ剃りの最中に晩御飯を食べる主人に、怒りもしないで「家族の食事は大切だから・・・」と笑って受け入れていたあなたの寛容さ。

孫の学校の大掃除には、どの父兄よりも、人が嫌がるところの掃除を率先してやっていましたね。僕の子供たちの友達や先生は、みな、あなたのことを知っていました。



定年したのだから、のんびりと言う言葉に「ありがたいけど」僕はまだ働けるからと、ビルの掃除のパートをしていた義父。「あんたが完璧に掃除するから、わしらは差が出て困る」と仲間になわれ、「困った」と悩んでいましたね。その真面目さゆえに、手が抜けないあなたにとっては、手を抜いて仕事をするのは一番辛かったですよね。

ある日、僕の知人の不幸に、妻に喪服のスーツを持って来て欲しいと依頼した時に、心齋橋のオフィスに届けてくれたのは、あなたでした。「衛藤君、これでいいんか？違ってたら、また家に取りに帰るからなあ」と汗をかいて笑ってくれましたね。電車を乗り継いで片道40分の道のりでしたよね、当時の僕たちの家は……

僕は今でも考えます。自分の娘の婿に、イヤミも言わずに、笑顔で届け物ができるかと……。僕は一生かけても「人間力」では、あなたには勝てないと思っています。

僕が家族を日本に残して、アメリカに勉強に行くと言ったときに、義父が「僕が家族を見てあげるから、若いうちに可能性を伸ばしたらいい」と言って反対をしなかったのもあなたでした。僕の講演に来た時は「君は偉いなあ」「ガンバッテいるなあ」と最高のエールをくれましたよね。

でも、僕は知っています。どんなに仕事で社会に認められても、あなたの日々の真面目な生活には、とうてい及ばないことを……

昔、「あなたの娘さんと結婚したい」とお願いに行った、あの応接間に、あなたが手を合わせて眠って居ました。穏やかな死に顔に、「おとうさん頑張ったね。ありがとう。」とだけ言って僕は泣きながら笑顔を返しましたよ。あの思い出の日。トイレに立った僕に、後ろから「娘を頼むなあ」と肩を叩いてくれたあの日を思いながら……

僕は九州にいたため、義父の臨終の床には行けなかったけど、苦しみの中で、あなたは「早よ帰れ、皆の帰りが遅なる。喜久子（義母の名）、子供たちにおいしいもの食べさせてや。頼むな……」どこまでも、あなたらしい、思いやりのある最後の言葉でした。

「ガンバって！」と叫ぶ家族みんなの中で、空悟（僕の長男）が「もう、おじいちゃん、頑張らんでええ。もう、眠ったらええねん。おじいちゃんのぶん、これからは僕がガンバルから」って言ったそうですね。その後に「僕、残酷なことを言ってるか？そうやる」と妻に尋ねたそうです。「そうね」と言いながら、妻も心強く思ったそうです。だから、孫も大丈夫です。彼も強い男に成りつつあります。

以前のひとりごとにも書きましたが、ある聖典を読んでいた時に、この世界をどうして神は滅ぼさないのかという一説がありました。それは聖なる普通の人々の、あたりまえの日常によって神は、この世界を滅ぼさないとありました。その聖なる人は、会社の成功者でも、有名人でもなく、はたまた、先生と言われる政治家でもないそうです。





それは、人知れず、人の嫌がることを引き受け、あたりまえに家族を愛し、そして、普通であることを腐らないで、笑っているような聖なる人の日常があるからだとなりました。そんな優しい穏やかな“儼なる日常”を考えても、僕はあなたのように穏やかな生き方ができそうにありません。だから、僕は、あなたに憧れてしまう。でも僕のそんなガムシャラな生き方にも、あなたは「好きに生きなさい」と応援してくれると勝手に思ってしまうのは、あなたの優しさを知っているからでしょうね。

ホリエモンよりも、小泉首相よりも、僕はあなたに勝てない。その質素な日常の生活に満足して生きてきたあなたに・・・その目立たない聖なる生活に、多くの人は救われていたと思います。

どんどん、ステキな先輩達が、この世から居なくなるのは淋しいですね、お義父さん。

僕の著書の「イーグルに訊け」のオビに、推薦文を書いてくれた、河合隼雄先生も亡くなりました。子供の時から口ずさんでいた歌の作詞家の阿久悠さんも亡くなりました。

波が変化を恐れたまま、自分を変えなければ、次のウェーブを起こせない。だから、波は変化を恐れずに大海の中にもどってゆく、その変化の力が、また新たな波になるのですね。変化は自然界では、あたりまえの営みなものだから。死は、新たな誕生への原動力なのですね。

インディアンが言うように、変化を受け入れることが、すべての優しさにつながるのなら僕も、あなたの「さよなら」を受け入れましょう。そして、木々の中、風の中、川のせせらぎに、あなたは帰ると信じています。ひと時の夕日の光に、あなたの笑顔を感じて、意味なく、ふと涙が出るのが今はあります。

さよならの意味を分かっているつもりでも、なぜだか今年の夏は、夏祭りの後のように、淋しさを感じてしまうのです。

さようなら、お義父さん。そして、またどこかで会いましょう。